

川島海

## 第五区

溺れているようなクロールで  
わたしが必死になって泳ぎ切る頃  
あの人は飛び出すように丘が上がって  
大きな球を力強く蹴っていた

泥に塗れたスパイクで  
わたしがようやく球を浮かせた頃  
あの人は頼もしい肩に紫の襷をかけて  
ピッチの向こうで駆け出していた

三年前にあの人が駆け降りた山道で  
少し色褪せた襷の冷たさを感じた時  
わたしだけの冬の空気は確かに血の味がした

沿道の声援が泡のように弾けて  
あの人の面影を追い越した

風待ちのような一瞬に  
私は新しい息をした